

『春へ』

著:朝丘 戻

ill:小椋ムク

チャイムを押した。

閉ざされたドアの奥で、ピンポーン……ン、と、ゆったりした音が鳴る。運命の鐘ってこんな間抜けな音なのかな、なんて思う。

運命。でもそれは、俺の、というより、父さんのも含めたものだ。

「はい、どちらさま」

ドアは難なく開いた。インターフォン越しに応答があるかと予想していた俺は、一瞬息を呑(の)んで相手を見る。

耳が隠れるほどのびた黒髪と眼鏡。目鼻立ちのすっきりした、きれいな顔だった。父さんに聞いていたとおり。だけど疲労感がうかがえる猫背と、寒そうな素足と、水色のシャツのよれ具合や、手についた絵の具の汚れが気になる。

彼も訝(いぶか)しげな表情で、俺を見ている。

「誰？」

不(ぶ)躡(しつけ)な口調で訊かれた。

「十(と)希(き)です。小(こ)嶋(じま)、十希(と)希(き)っていいです。小嶋啓(けい)吾(ご)の息子(こ)です」

「小嶋、啓吾……？」

「はい」

容赦なく、ぱたんと閉めだされた。

「開けてください」

どンドン、とドアを叩いて頼む。

「帰れ」

たったひとことで拒絶されてしまう。

「お願いします。俺は貴方をどうしようなんて思ってません」

「されてたまるか」

「とにかく話を聞いてくれませんか」

「聞くことなんてなにもないな。……だいたいなんで息子がくるんだよ」

苛(いら)立(だ)って怒(こ)って、困(こ)っている。でもこうなるのは、あたり前かもしれない。

もう一度ドアを叩いた。

「用事はすぐにすみませす」

「こっちはおまえの父親に二度と関わりたくないんだ」

「渡(わた)したいものがあるだけです」

「持って帰(かえ)ってくれ」

冷たい声だった。ただでさえ外は雪で凍えそうなほど寒いのに、冷気が充満するマンションの廊下へ鋭く厳しく響き渡る。

ドアを叩いていた手をおろして深呼吸し、姿勢を正した。

「父は先日、亡くなりました」

「は？」

「最(さい)期(ご)の願(ねが)いだったんです。生前父が貴方に届けたくて、できなかった手紙を受けとってくださいませんか。読まないで、捨ててもいいから」

父さんが言っていたままの言葉を告げた。

——捨てられてもよかったはずなのに、渡せなかったんだ。

ドアノブがまわって、ドアがふわと浮きあがるように開いた。

「……死んだのか」

無表情で彼が問う。

俺は頷(うなず)くだけで返して、彼の顔をまっすぐ見あげた。

俺も会(あ)いたかったんだ。幼(こ)いころ俺の心を一瞬で極彩色に輝かせてくれた絵の作者であり、父が人生でたった一度だけ恋(こ)した同性の、この人に。

父さんが亡(な)くなったのは二ヶ月半前。俺が高校生活最後の夏休(なつやす)みを終(お)えようとしていた八月下旬の、晴(は)れの日(ひ)だった。

もともと誰もが「A型らしい」と評(ひ)する几(き)帳(ちょう)面(めん)な性格(せいかく)だった父(ちち)さんは、三十五歳(さんじゅうごさい)の若(わか)さで自(みづか)りが不治(ふじ)の癌(がん)に冒(おか)されていると知(し)ってから、臆(おく)することなく死(し)への準(じゅん)備(び)を始(は)めた。

身(み)辺(へ)整(と)理(り)だけじゃなく、俺(おれ)がひとりで生(い)きるために必要(ひつよう)な知(ち)識(し)と、家(か)事(じ)全(ぜん)般(ぱん)をこ(こ)と細(こま)かく叩(たた)きこんでもくれた。おかげで俺(おれ)は掃(は)除(じょ)、洗(せん)濯(じやく)、料(りょう)理(り)が完(かん)璧(ぺい)にこ(こ)なせるところか、掃(は)除(じょ)機(き)や洗(せん)濯(じやく)機(き)の機(き)種(しゆ)の特(とく)徴(てい)や、味(あじ)噌(そう)汁(じゆ)に使う味(あじ)噌(そう)の種(しゆ)類(るい)にま(ま)で詳(くわ)しくな(な)った。もし停(と)電(でん)にな(な)って炊(炊)飯(はん)器(き)が使(つか)えな(な)くても、ひと(ひと)り用(よう)のお鍋(なべ)でごはんをおいしく炊(炊)くこと(こと)だ(だ)ってで(で)きる。

五(ご)つ(つ)のころ母(はは)さんが交(こう)通(つう)事(じ)故(こ)であ(あ)っけなく亡(な)くなったから、物(もの)心(こ)つ(つ)いたとき(とき)からある程(ほど)はこ(こ)な(な)して(して)いた(いた)んだ(んだ)けど、父(ちち)さん(さん)として(して)は母(はは)さん(さん)の無(む)念(ねん)さ(さ)に報(むく)いる気(き)持(も)ちもあ(あ)った(った)んだ(んだ)と思(おも)う。自(みづか)り(り)は(は)なに(なに)も(も)ひと(ひと)つ(つ)後(ご)悔(かい)が(が)ない(ない)よう(よう)に、や(や)り(り)残(ざん)さ(さ)ない(ない)よう(よう)に、言(い)い(い)逃(に)げ(げ)さ(さ)ない(ない)よう(よう)に(に)する(す)よ、と。

父(ちち)さん(さん)の闘(と)病(びやう)生(せい)活(かく)は四(よ)年(ねん)に及(およ)んだ。

最(さい)初(しよ)は腹(はら)痛(いた)で病(びやう)院(いん)へい(い)って、盲(もう)腸(ちよう)だ(だ)と診(しん)断(だん)さ(さ)れた(れた)だけ(だけ)だ(だ)った(った)んだ(んだ)。でも手(て)術(じゆ)のた(た)め(め)にお腹(はら)を開(ひ)いた(いた)ところ(ところ)、癌(がん)が(が)見(み)つ(つ)か(か)った(った)。発(はつ)見(み)が(が)は(は)やく(やく)て(て)よ(よ)か(か)った(った)、と励(はげ)ま(ま)さ(さ)れて(れて)一(いち)度(ど)は回(わ)復(ふく)した(した)もの(もの)、二(に)年(ねん)経(けい)た(た)ず(ず)に再(さい)発(はつ)。父(ちち)さん(さん)は「ヤブ医(い)者(しや)だ(だ)った(った)の(の)かな」な(な)ん(なん)て(て)担(たん)当(たう)医(い)を(を)擲(やく)し(し)な(な)が(が)ら、俺(おれ)を(を)不(ふ)安(あん)が(が)ら(ら)せ(せ)まい(まい)と(と)して(して)笑(わら)って(て)く(く)れた(れた)。

臆(おく)病(びやう)なく(なく)せ(せ)に、大(だい)切(せつ)な(な)もの(もの)を(を)守(まも)るとき(とき)は(は)ど(どこ)も(も)強(つよ)い(い)、父(ちち)だ(だ)った(った)。

今(いま)年(ねん)に入(い)って(て)父(ちち)さん(さん)が(が)会(かい)社(しゃ)を(を)退(たい)職(しやく)して(して)から(から)は(は)家(か)で(で)介(かい)護(ご)した(した)。本(ほん)人(にん)は「十(じゆ)希(き)の迷(まよ)惑(ごく)に(に)な(な)る(る)から(から)入(い)院(いん)する(す)よ」と言(い)った(った)けど(けど)、ぎ(ぎ)り(り)ぎ(ぎ)り(り)ま(ま)で(で)家(か)に(に)い(い)て(て)ほ(ほ)しい(しい)と(と)せ(せ)が(が)んで(んで)、と(と)め(め)た(た)。

は(は)やく(やく)家(か)に(に)帰(かえ)って(て)父(ちち)さん(さん)の体(てい)調(てう)や(や)気(き)分(ぶん)を、神(しん)経(けい)を(を)研(と)ぎ(ぎ)澄(す)ま(ま)して(して)観(くわん)察(さつ)する(す)毎(まい)日(にち)。

今(いま)日(にち)は、ま(ま)だ(だ)元(げん)気(き)。今(いま)日(にち)は、食(しょく)事(じ)を(を)残(ざん)して(して)し(し)ま(ま)った(った)。今(いま)日(にち)は、歩(あ)く(く)の(の)が(が)辛(つら)い(い)そう(そう)。

そ(そ)んな(んな)ふ(ふ)う(う)に(に)父(ちち)さん(さん)を(を)心(こ)配(はい)して(して)緊(きん)張(ちやう)する(す)日(に)々(じつ)の(の)なか(なか)、俺(おれ)は(は)二(に)日(にち)に(に)一(いち)度(ど)は(は)レ(レ)ン(ン)タ(タ)ル(ル)シ(シ)ョ(ョ)ッ(ッ)で(で)父(ちち)さん(さん)が(が)大(だい)好(こう)き(き)な(な)映(えい)画(が)の(の)DVD(ディーブイディー)を(を)借(か)り(り)た(た)り(り)、本(ほん)屋(や)で(で)本(ほん)を(を)買(か)っ(っ)て(て)き(き)た(た)り(り)した(した)。

昔(むかし)から(から)映(えい)画(が)や(や)演(えん)劇(げき)や(や)絵(え)画(が)展(てん)によ(よ)く(く)で(で)か(か)ける(ける)多(た)趣(しゆ)味(み)な(な)人(ひと)で(で)、俺(おれ)も(も)子(こ)ど(ど)も(も)の(の)ころ(ころ)は(は)あ(あ)ち(ち)こ(こ)ち(ち)連(れん)れ(れ)ま(ま)わ(わ)して(して)も(も)ら(ら)って(て)いた(いた)から(から)好(こう)み(み)も(も)熟(じゆく)知(ち)して(して)いる(いる)。

父(ちち)さん(さん)が(が)「今(いま)日(にち)観(くわん)た(た)映(えい)画(が)は(は)最(さい)高(こう)だ(だ)った(った)よ」な(な)ど(ど)と(と)は(は)し(し)や(や)い(い)で(で)く(く)れる(れる)よう(よう)す(す)に、心(こ)から(ら)ほ

つとした。家にいてほしいと願った手前、“病院のほうが体調を崩しても安心だし、看護師さんや患者さんと楽しく過ごせたかも”って、哀しませたくなかったから。

夜にはふたりで映画や、読んだ本の話や、いっぱいした。作品の内容から話がひろがって、母さんとの恋愛話や学生時代の思い出話も聞いた。

たとえば喧嘩をしたあとなかなか会ってくれない母さんを、父さんが雨のなかで待ち続けたとか。

学生時代は携帯電話がなくて、友だちが彼女をデートに誘うとき、電話ぐちに父親がでてびっくりして切ってしまって、大笑いしたとか。

初めて好きな人を抱いた夜の焦(あせ)りや、怖(おそ)れや、喜びも、恥ずかしがらずにきちんと教えてくれて、「全然卑(いや)しいことじゃない、とっても幸せなことなんだよ」と諭してくれた。

ちゃんとむかい合って話してみると新しい発見ばかりで、父さんもひとりの人間の男なんだと感じ入る。自分と同じ年齢のころに、自分と同じ失敗をしたり、同じ悪さに憧(あこが)れたり、恋をしたりしてきた人。

息子の俺は、父さんは生まれたときから“父さん”という完璧な生きものだったような錯覚をしていたけど、瘦(や)せ細っていく薄い身体の奥には、そこへ至るまでの歴史があった。経験があった。心が、あった。

過去に浸る父さんは、子どもにかえたように無邪気で楽しそうだった。

俺は受験生になっていたけど予備校にかようのを断念したので、なるべく勉強もした。横で嬉しそうに眺めていた父さんのやつれた笑顔が瞼(まぶた)の裏に鮮明に焼きついていて、目を閉じて開けば、まだそこで笑っている気がする。

思い返せば、あのころが一番楽しくて平和だった。お互い仕事や勉強に翻(ほん)弄(ろう)されていたすれ違いの日々とは、あきらかに違う時間。俺は一日一日の出来事や父さんとの会話を忘れたくなくて、大切に日記につけ続けた。

『旭(あさひ)へ』と書かれた手紙を見つけたのも、そのころだ。

本文 p10～17 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>